

---

# 夢想椅子尻少年少女への何か

宇ノ鹿 すい

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夢想椅子尻少年少女への何か

### 【NZコード】

N9366R

### 【作者名】

宇ノ鹿 すい

### 【あらすじ】

ああああああああああああああああああああ。

暗闇の中にいるとくつせりと浮かび上がってくる輪郭が向こう側にあつて、それは思うのだけれど、のっぺらぼうだ。目鼻口が無くて輪郭だけがある顔に、乳首にあたる部分に両眼があつて、ヘソにあたる部分に唇がくつ付いている。しかし唇は縦にくつ付いているものだから、奇妙だ。気持ち悪い。乳首の部分に付いている両眼も、黒目と白目が逆になつているから不思議。しつかりとその眼で物を見ることが出来ているのだろうか、と、気にかかる。夜目が冴え渡つていて、ずつと気にかかる。永遠に気にかかる。たいとも願う。

頭の中で、蝙蝠が洞窟で羽ばたいている間にずっと唱え続けるあの呪文、解せない呪文をのっぺらぼうは縦の唇をぱっくりと開くことで呟いてみせた時に、ああ最悪、と不埒なものを感じさせられた。のっぺらぼうと眼を合わせていることがもう嫌だったので、足を上げて、逆立ちをしていた過去のことがふとよぎった。関係の無いことだったので気にもせず、居間に降りて、一度と動かない糸のちぎられてしまつた人形の一体、を、拾い上げたけれど、それが何だったのか、何と呼称される物体だったのか、忘れてしまつていた。のっぺらぼうのせいだ、と慌てて、人形を胸に抱きしめたまま居間から出でみると、空間が途切れていったから先に進めなくなつていた。或いは、元に戻れなくなつてる。「ねえ、なんだつたっけ」人形になるべく優しく聞こえるような聲音で話しかけてみたけれど、空間の途切れているのをじつと見つめているだけで、応えてくれない。だからあだ名を考えてそれを人形の、仮の名にしてみる。無言のまま動かないから、あだ名は、むごん。でもやっぱりださいと思つたから、そんなあだ名のことはすぐに忘れた。その代わり、逆上がりのことを思い出した。二日月に向つて足を出して、くるんと弧を描いて、宇宙を飛んだような気持ちになつた瞬間。校庭に誰もいなく

て、みんな授業という名目で箱庭に閉じこもっているのを小馬鹿にしていたような、ひどく哀れんでいたような、昔の記憶。でも逆上がりを二十回くらいに繰り返した頃に、もう一度弧を描いた時に思い出したんだ。そうだった。プール掃除をするんだつたつ、て。

一人で向ったプールサイドには本物のお月様が映り込んでいたけど、そんなことを気にしていることはすぐに止めて、プール掃除を誰が代わりにやってくれたようだと感心していた。足をその水に浸からせてみると、温泉のように暖かいのだと驚く。慌てて服を脱いで、プールの中に身をうずめてみると気持ちが良かつた。だけど途中で頭を誰かに押し込められて、苦しくなって、うー、うー、と必死に抵抗をして頭を抑え込んでくる奴に足蹴りをかましてやりたかった。けど温泉の中に浸かっていた、ふやけてしまった体は鈍ったらしくて、重たくて、足蹴りなんて水圧にも邪魔されて出来なくて、殺されてしまうのかなと泣きたくなつた。その時に、頭を抑えている奴の声が聞こえたような気がした。「ふにやけた、ふにやけ。なんだか、わかる？」

途端に、温泉が全て冷水に変わつた。違う、血が冷えたんだ。とも思ったけど、温泉が冷水に変わつたみたいで困つた。困つている内に、排水溝が水を飲み込んでいく音が轟いていたから、気が付いた時には服を脱いだ姿でプールサイドに横たわつていた。下着を付けておいてよかつた、恥ずかしくないや、と思いながら、むくりと起き上がりて頭を抑えこんでいた奴はどこだ、と思っていたけどすぐにつつかつたから、「わかるよ。そのことについて話したかったけど、上手にできないんだね」と優しいふりをして話しかけてみた。すぐにつかはれた。

「ふにやけはさ。探していたけど血が噴き出ちやつたから、もう持ち歩けないもん。いまのところ牢屋にぶち込んであるんだ。今度一緒に、出会いにいかない？ あなたを抱いで行くのは私だから問題はないんだし」

「いいよ。暇だから。箱庭に閉じ込められているよりは、箱庭から

飛び出たと勘違いできる箱庭の方が大人になつたつて思えて、気持ち良いんだ。ふにゃけは血がたくさん出たのに、大丈夫だったの？ 生きてるの？」

当たり前さ、と得意気に胸をどんと叩いてから、服を一着取り出して、自分の分と、こっちの分、と言った風に分け与えて、プールの浴槽の中からのつそりとした動きで出て来た。服を着替えるのは丁度同じくらいの速さだったけど、なんだか恥ずかしい時間だから、一生の中でも忘れることがあまりない着替えの時間だったと思う。

暗闇に再び戻ってきて、眼を何度もしばしばとさせてたけど夜目があんまり冴え渡つてくれない。眠気がもうじき訪れて瞼が降りちゃうなと経験から知っているから、寝室に向うために居間を通り抜けようと戻った。だけど、空間の途切れが居間にも生じはじめていたから、はやくしないと寝室に繋がっている空間も途切れてしまつて瞼が降りちゃう時に気持ち良くなれいや、と焦つて、走つて、だけど人形を落としてしまつた。人形の首はもう垢まみれで汚れていて、いまにもちぎれそうな程にボロだつたから、落とした衝撃でとどめに変わつちゃつたのを見て、別に悲しくもなかつたのが、ちよつともなしいなあつて思えた。空間に向けて走りながらそんなことを考えていると、ふと、なんで人形しかここにはいないんだろうと不気味に思つて、親近の人を捜し出すために千里の道だつて行ければいいのにと呴いてみたら、その瞬間にのつペラぼうが途切れいた空間のその、隙間を縫うようにして現れた。「人間なんていらないよ。のつペラぼうの僕がいればそれでいいじゃない」抑揚の無くて気持ちの悪いのつペラぼうは、それが本性みたいだつたから怖くなつて、道を戻つて人形を抱きしめたけど、首がないから、かえつて嫌な気分にさせられた。仕方が無いから居間のちゃぶ台に置かれていたサングラスを装着してから、昨日見たテレビでやつてた魔法の動きを真似してみた。悪い心で呪えば相手は罰され、良い心で呪つても相手は罰されるという魔法の動きを、昨日、夜目が冴え渡

つていた時にずっと練習してた。失敗したしつまんなかったりいらしかせられたり大変だったけど、今は自信があるから、はりきっと、サングラスをつけたり外したりしながらムーンウォークをして、最後に月光蹴りを決めた。月光蹴りはヒーロー村雲しか出来ない必殺の技だったけど、案外頑張つたら出来る。これで魔法の動きは完成させられる。魔法の動きは月神を呼ぶという話だったから、それがどんな人なのか楽しみで、わくわくしてて、「のっぺらぼうなんてどうでもよくなつて、もう怖くない、ただの気持ち悪い人。たつた今、もうこっちから呪つたんだから」

「お前、なにかしたか？　月光蹴り、格好よかつたぞ」

唇がぴらぴらと左右に開くのが最悪に嫌だつたはずだけれど、月神さまの姿を想像することが心地よいから、のっぺらぼうのことも許せるようになつてた。「ありがとね」一日中頑張つて完成させた月光蹴りの技のキレを褒めてもらえたし、あとはもう月神さまが目の前にでも後ろにでも額縁の裏にでも、とにかく何処でもいいから、現れてくれれば全部それで満足なはずなのだけれど。

何時になつても現れないから瞼が閉じてしまいそうになつてしまふ未来がやつてくるかも、なんて思いを馳せてしまふくらいに月神さまは落卜スピードが遅い。降臨するなら、すわっと、瞬間に現れてくれればいいのに。きっと降臨する神々しい存在は、勿体ぶつた偉そうな速度で、お茶でもお茶碗に注ぎながら、用にある自宅で今頃ようやく重い腰を上げ始めて、どんな降臨の仕方が演出的に格好いいかな、とかやつてるのかもしれない。「いやー、面倒くさいけど俺、月神だしなあ」みたいな、うざつたらしい感じの性格に違いない。

なんだかむかついたから、月光蹴りをもう一度やつてみようと思つて、足を振るつた。すると「ワンダフオー！」とのっぺらぼうが褒めてくれるけど、自分の唇が気持ち悪く動いてることをのっぺらぼうは知らないもしくは忘れている、あるいは、こっちが嫌な思いをしているのを知つてわざとやつている。もう構わずに、足蹴り

を何度もした。必殺、月光蹴り！

ある時、月光蹴りをしていたら空間が裂けた。びっくりしたけど、のっぺらぼうはもつと驚いたと思う。だって、その裂けた空間から出て来た人物が一人いたのだけれど、その人はのっぺらぼうの恋人だつた奴だったのだもの。だけど一瞬だけで、すぐに空間の隙間に隠れてしまつたから、のっぺらぼうは慌てて唇をぱくぱく開いてから、恋人の後を追うようにして、空間に飛び込んでいつて消えた。空間はのっぺらぼうが隙間に入り込んだ途端に、貝殻が閉じるようにして、居間の風景を元通りに戻したから、人形たちの姿が再び見えるようになった。まだ残っていた空間の裂け目にわずかな人形たちを全部放り込んでから、自分もその裂け目に入り込もうとしたけど、そのまま貝殻が閉まつて、自分が取り残されちゃつたから、なんにもかんがえたくなつた。

で、ぼや、とした白い霧が思い出の景色を作り出していつて、ふと気が付くと箱庭の記憶に飛翔していくんだとなつて、月に向つて飛翔していた。月面のクレーターの一番へこんでいるところに着陸してから、旗を立てるど、月から地球を眺める。夜目が冴え渡つているから、地球の蟻んこですら見えているから、校庭の位置を探り当てるのも簡単なものだ。

「いつてくる」月神さまに別れを告げてから、ふわっと宇宙を舞う。スペースステブリにぶつからないように月神蹴りを無限のぶで繰り返しているから乳酸が溜まつたけど、月神蹴りという最新の必殺技は身体に負担がかからない必殺技だから、一億回繰り返しても大丈夫。だから百人乗つても大丈夫、つてわけにはいかないしそれは別の話、と思っている内にはもう、校庭で逆上がりしていた。

まだみんなは箱庭の中で授業というものをやつしているらしかったけど、逆上がりと月光蹴りを覚えることの方が重要に決まつてゐるだから外に出ればいいのにと、一回くるんと回るたびに呻いていたら、耳元でこそばゆい、囁くような声が生じた。「そう思うのはね、きみがわたしに怒られて授業を受けるのがもう嫌になつちやつたか

らだよ。友達とも脛蹴りをしあつたばかりだからだよ

何時の間にいたんだろう。と思つて呑氣にくるくるしてたら、鉄棒の鉄の部分がそいつに握り締められていて、握力だけで、鉄が溶けた。熱を当たられたかのように、溶けちゃつてた。それにふと触つてみると、あまりにも熱いせいで右腕が全部溶けちゃつた。骨まで残らず、溶けちゃつた。

「どうしよう。助けて」

でももういなくなつてた。耳元で囁くように言葉を告げた癖に、もう影も形も見当たらないから、校庭には再びひとりぼっちの自分がいた。逆上がりも出来なくなつたし、右腕も無くなつてしまつたのだから、何がこれから先出来るのか、あてが見当たらない。空を見上げたら、雲が流れているのが成り行きで、助言もなくて、仕方が無いから教室に戻つて授業を受けようと思つてはいる道の途中に、気が付いた。みんなは、受け入れてくれるだろうか、片腕の自分を。

不安のあまりに吐き気をもよおしてしまい、保健室に向つて体温計で熱を測つてもらうと、三百八十六度という数字が出てきたから、思わず顔を上げて、体温計をさつき渡してくれたばかりの人のことを見てみると、三百八十六度の熱のせいで、皮膚がただれてしまつてはいるのに、無理をしてこつちに微笑みかけようとしている人だつた。だけど、無理をしているから、引きつった微笑みになつていて、見れたものじゃなかつたから、申し訳ないあまりに泣きたくもなつたけど、泣くわけにはいかなかつた。涙は蒸発して霧になり、眼を焼いてしまうと直感が忠告したから。本当かな?と疑問に思つていると、耳元で再び囁かれたような気がした。けど、勘違いで、幻聴だつた。保健室を全て溶かしていく途中で、教室の箱庭から飛び出してきた、もつとも頭の良い人間として注目していた人が、三百八十六度の熱の影響をすぐに受けて、皮膚をただれさせてしまわされた。三百八十度の熱のせいだ。「誰のせいだ?」頭の良い人間は独り言のようにして、尋ねてきた。だから答えた。

「自分でも、夢ならいいと思つてるんです」

空間が怒り出した。無責任な言葉に対する報復だと思つ。空間は三百八十六度など物ともしない圧迫感で次々に、自分のそれを折りたたんでいき、ついでにこちらのことも折りたたんでしまうやうだった。だから逃げなくちゃペちゃんこにされてしまうはずで、焦つてしまつ。でもお尻が、熱のせいで、鉄にくつ付いてしまい剥がれない。「そのまま逃げるしかねえよ。あわれな椅子尻」言われる言葉に涙しながら、保健室を後にする。

押入れの中で、随分と身を隠すことになつたのは、椅子尻と呼ばれた屈辱を永い間引き摺つっていたからだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9366r/>

---

夢想椅子尻少年少女への何か

2011年11月12日18時40分発行